緋色の記憶

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋色の記憶

【Ｎコード】
Ｎ３８９０Ｚ

【作者名】
布袋しぐれ

【あらすじ】
突然失った幸せの日々。同胞たちは、すべて瞳を奪われ、殺された。その瞳のために、殺された。
闇市場で高値で取引される、『緋の目』のために。
許せない、絶対に取り返してみせる。
生き残った、私たちふたりにかせられた、使命。きっとこれが運命。

偶然の出会い

殺された、いなくなった、同胞たち。必ず、仇をとると、幼馴染は言った。必ずや、この同胞たちの目を、取り戻してみせると。

私たちは、特異な民族だった。感情が高まると、瞳が鮮やかな緋色に変化する。それゆえに、苦労することは多かった。闇市場でかなりの高値で取引されていたことは、周知の事実だったから。私たちは、自分の身を守るための、護衛術は心得ていた。この血は、途絶えさせてはならない。とても、小さな頃、そう長(おさ)は言っていた。記憶に残っている。

その翌日、私たちクルタ族の同胞たちは、目をひとつ残らず、奪われた。

目の前が真っ赤になった。生き残ったのは幸運だった。幼馴染と、たまたま少し山を越えた向こうに、出かけていたから。食料を、探すために。力が抜けたように、籠が手から滑り落ちた。

「・・・父さま・・・？」

「・・・幻影旅団の・・・・し・・・・」

「クラピカ？」

「くっそ・・・幻影旅団の仕業だ・・・・」

「・・・なんでそう言えるの」

「前に聞いた、長(おさ)からも・・・同胞が、襲われたと・・・・蜘蛛の刺青の入った、やつに」

「・・・それって・・・・」

「・・・ああ・・・そのときも、目は奪われていた・・・・居場所が、バレていたんだな」

「随分と、冷静ね」

「・・・いいや、冷静に見えるか？」

「分からないわ・・・私、もう目の前真っ赤だもの」
「私もだ」
「・・・クラピカ、私たち、どうすべきなのかな？」
「目を、取り戻そう」
深いため息を同時に、クラピカは小さく、それでも力強く言った。
次第に感情も落ち着いてきて、目の前がクリアになる。頭に血が上ったせいか、少しぼうっとするが。
「どうすればいい？」
「どうすればいいのか、分からない」
「・・・私、闇市に紛れ込もうか？」
「ば・・・そんな危険なまねをするなっ」
「うーん・・・でも情報は入れられるかもよ？その、幻影旅団？の情報も手に入るだろうし」
「何を考えているかと思えば・・・くだらないことを言うな」
「でも、それ以外に、方法ってある？」
「・・・それは」
「いいの、私なら大丈夫。クラピカの心配には及ばないわ」
「・・・心配はしておらぬさ」
「まあ、随分なもの言いね」
「クルタいちの術師が」
「護衛術だけれどね」
「・・・連絡は必ず、取り合おう。週に一回は、かならず・・・そうだな、ここで」
「・・・危険じゃない？」
「大丈夫なのだろう？」
「分かったわ、クラピカ」
「ああ」
「・・・ねえ、クラピカはどうするの？」
「私か？私なら心配ないさ。情報を集めるよ」
「・・・集める？」

「ああ」
多分、これがきっかけだっただろうな。
私たちはそれぞれ分かれて、この日以来、一週間ごとに会っては、情報を交換していた。最も、ほとんど収穫はなかったのだが。
しかし、その生活が数ヶ月続いた、ある日、会うことはなくなった。来る日も、来る日も待っても、クラピカは来なかった。何があったのか、聞く術もなく。私たちは、共に１７歳になった。

闇市場は、反吐が出そうなほど、気持ちの悪いもの好きの連中もいる。黄色の髪色に、茶色がかった瞳。この容姿だけでも、十二分に目立つというのに。クラピカに最後にあった日に、貰ったカラーコンタクトをいれていても、やっぱり目立つものは目立つ。
「お嬢ちゃん、君、いくら？」
「・・・売り物じゃないわ」
「機嫌が悪いね、どうかしたのかい？前の客の気前が悪かった？私はその１０倍はだそうか？」
「うるさないあ・・・売り物じゃないって言っているのが聞こえないの」
「ん？」
「こンのっ・・腐れ変態野郎！」
「うっがぅっ！？」
男の顎に蹴りを入れると、一瞬、顔が緩んだ。とんだ変態だったみたいだ。とりあえず、ひと安心。
「お見事」
「誰？仲間？」
「いいや。ボクはただの通りがかり」
「何？」
「素晴らしい蹴りだったね、何か習っていたのかい？」

「まあね」
「そうか、いつかお手合わせ願いたいものだ」
「（そんな真面目なヤツに見えない・・・）いいわよ、私はマリア」
「うん、マリアね。ボクはヒソカ」
「・・・ふぅーん・・・」
「それにしても、君、随分と若そうだけれど？」
「失礼ね、もう１７よ」
「ここがどこか分かってる？」
「分かっているわ。愚かじゃない」
「愚かじゃなかったら、ここにいないんじゃない？」
「事情って人によるでしょう」
「・・・うん、そうだね。気に入った。お茶でもどうだい？疲れただろう？」
「・・・いいわよ」

偶然って、本当に恐ろしいものね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3890z/

緋色の記憶

2011年12月13日05時58分発行